

靱形埴輪の変遷について

—実用靱との比較検討を通じて—

筒井崇史

1. はじめに

筆者は以前、京都府相楽郡木津町市坂に所在する瓦谷1号墳から出土した漆塗り革製靱について詳細な報告を行ったことがある。^(注1)古墳から出土する靱(以下、実用靱と呼ぶ)については、近年、観察報告や編年案の検討などの研究が意欲的に行われており、筆者の報告もその一端を担うものであった。このように実用靱に関する研究成果が蓄積されつつあるわけだが、これまで、不明な点が多かったためか、実用靱と靱形埴輪の比較を試みた研究は皆無であった。したがって靱形埴輪が実用靱をモデルとして製作されたという指摘はされていても、検証されたものではなかった。そこで、靱形埴輪とそのモデルとされる実用靱の形態的特徴について比較検討を行うことは、靱形埴輪のもつ諸属性を理解する上で重要な手がかりとなるのではないかと考える。そればかりでなく、諸属性の変化を明らかにすれば、靱形埴輪の変遷もまた明らかにできるものと思われる。

小稿は、実用靱と靱形埴輪の比較検討を通じて、靱形埴輪の変遷を明らかにすることを目的とするものである。

2. これまでの研究

実用靱は、これまでに30例ほどの出土が知られるが、^(注2)全体の形状を知ることのできる出土資料は、京都府瓦谷1号墳出土例(第1図B)をはじめ、滋賀県雪野山古墳出土例(第1図A)・福島県会津大塚山古墳出土例などわずかにすぎない。これらについては、筆者、杉井健氏、菊池芳朗氏によってそれぞれ詳細な報告を行って^(注3)いる。これらは、いずれも表面観察などを通じて明らかになった製作技法を中心とした報告であり、断片的な資料を含めて実用靱の材質や製作技法がバラエティに富むことを明らかにした。現段階では、資料数の不足もあって不明な点が多いが、いくつかの技術的な系統の存在を想定することができる。また栗林誠治氏は、全国各地の資料を収集して実用靱の編年を試み^(注4)られた。栗林氏は、実用靱を大きく据置式と携帯式に分類し、前者は古墳時代前期～中期に、後者は胡録の影響を受けて出現したもので、古墳時代中期後半～後期に盛行したものと考えられた。

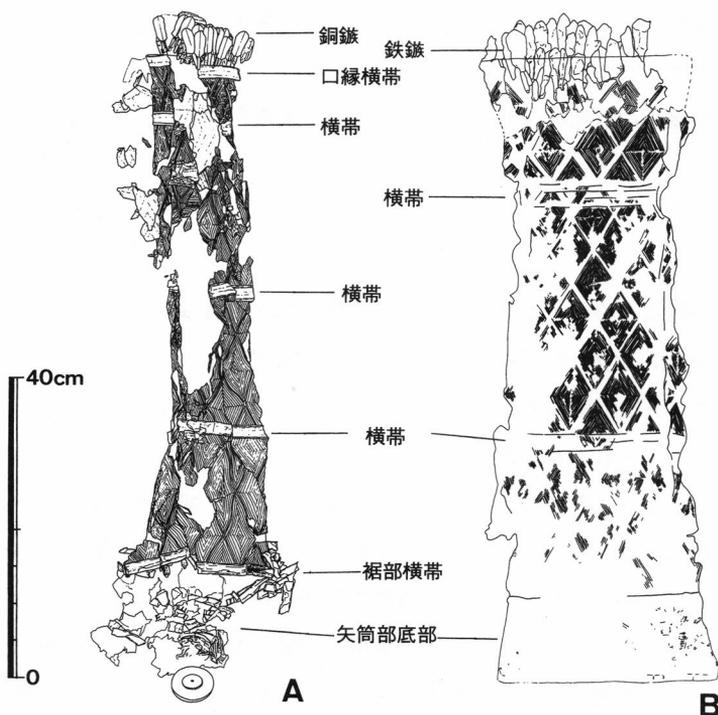
しかし出土資料を細かく分類されているためか、やや煩雑な感は否めない。

次に、靱形埴輪の研究についてみることにする。靱形埴輪が、他の器財埴輪同様、写実的なものから簡略化されたものへと退化していくことは早くから指摘されていた。靱形埴輪の変遷については、勝部明生氏・松木武彦氏・高橋克壽氏らによる成果があるが、いずれの論考においても、モデルとされる実用靱との関係は、十分に明らかにされていなかった。3氏の論考のうち、高橋克壽氏は、盾形埴輪や蓋形埴輪などとともに靱形埴輪の型式学的な変遷を明らかにされ、器財埴輪の編年案を提示された。以下、小稿にかかわる点について詳しくみていく。

高橋氏は、靱形埴輪を、箱形の矢筒部に板状の背負板(筆者は飾板と呼称^(注6))を表現したものの(一類)と、半円筒形の矢筒部に鱗状の背板がつくいわゆる奴鳳型を呈するもの(二類)に分類し、さらに一類を矢筒部と半円筒部との成形や鏃の描かれる場所によって3型式(一式~三式)に細分された。一類の3型式については、「製作技法の能率化・簡略化の方向」で一式から三式へと変化したと考えられた。大きさや直弧文の変遷もその変化に一致していることを指摘され、さらに出土した古墳の年代観からも変遷の妥当性を明らかにされた。盛行年代については、古墳時代前期末から中期後半とされた。一方、二類については、一類との間に大きな形態差があることや盛行年代がかけ離れることから、両者の関

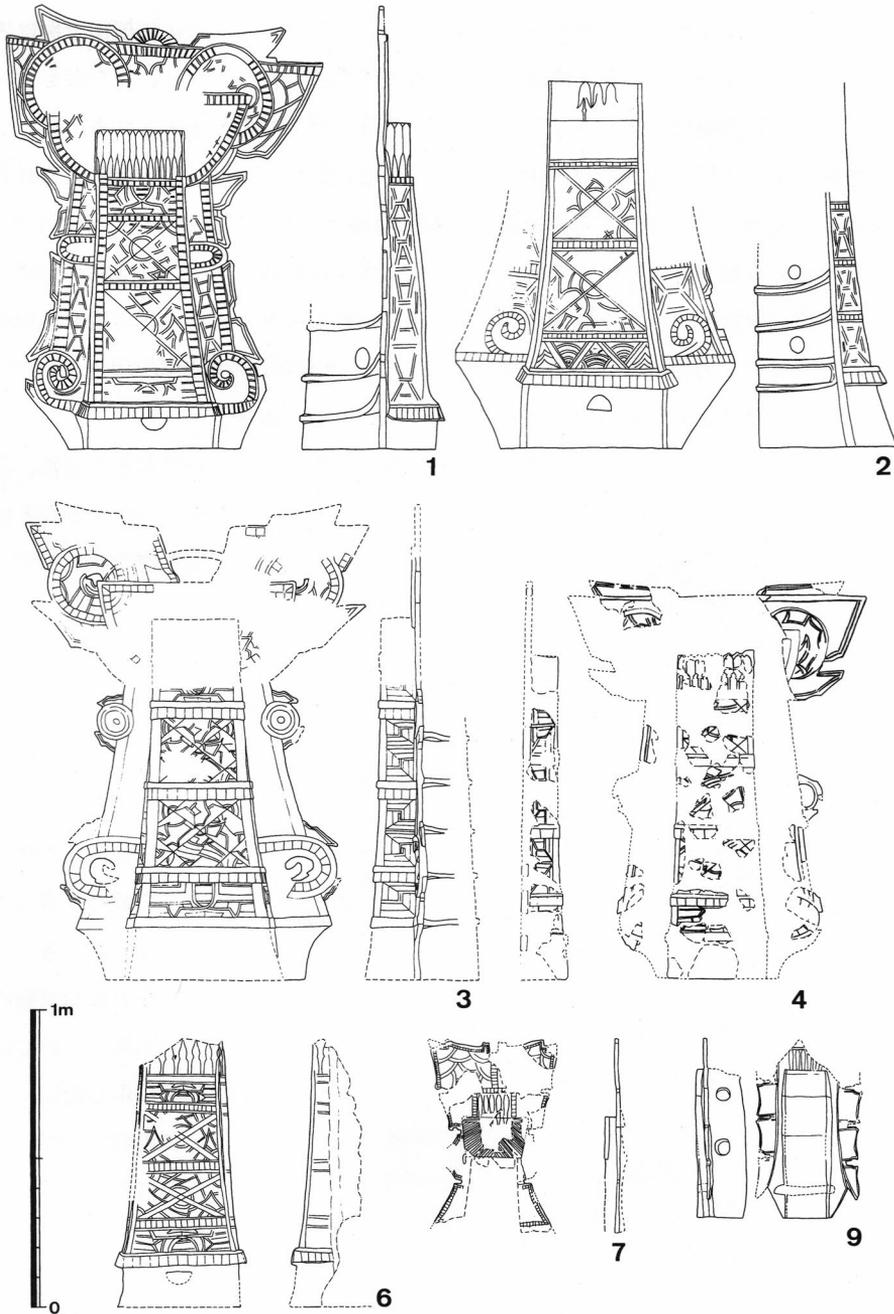
連性を否定された上で、原形となった実用靱が別種のもものではなかったかと推定された。

高橋氏の示された靱形埴輪の分類は、形態や製作技法にもとづくものであるが、それは靱形埴輪における分類・変遷であり、最古の靱形埴輪を検証できる資料は提示されていない。そこで筆者



第1図 実用靱実測図(出典は文末に記載)

は、現在知られている靱形埴輪の最も古い一群が、実用靱を直接のモデルとしたかどうかについて議論するために、実用靱と靱形埴輪の比較検討を行う意義があると考える。



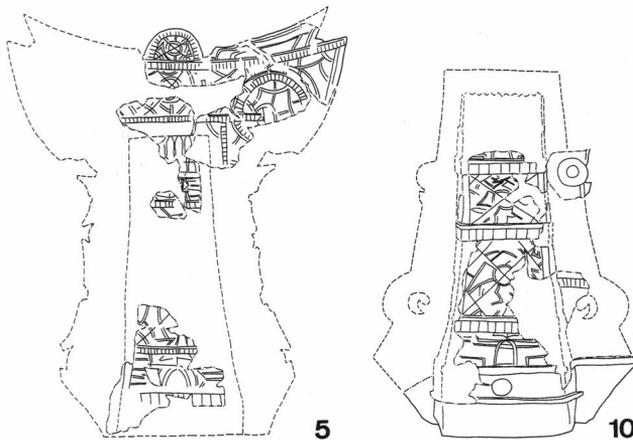
第2図 靱形埴輪実測図(1) 番号は付表に同じ(第3図とも、出典は文末に記載、一部改変)

3. 実用鞞と靱形埴輪の比較検討

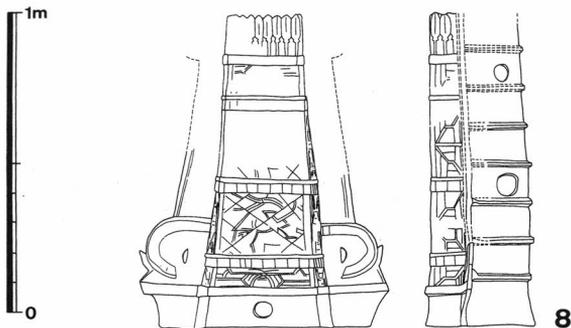
実用鞞の実例として滋賀県雪野山古墳出土例と京都府瓦谷1号墳出土例を取り上げる^(註7)。両資料は、栗林氏のいう据置式の実用鞞と考えられ、既に指摘したように、同一の製作技法で製作された実用鞞である。ただし、細部はかなり異なり、横帯のあり方などから瓦谷1号墳出土例の方が後出的な要素をもつと考える。共伴遺物から雪野山古墳出土例は古墳時代前期中葉に、瓦谷1号墳出土例は古墳時代前期末葉に位置づけられ、現在最も古いと考えられている靱形埴輪よりもさらに古い時期に製作されたものと考えられる。

靱形埴輪は遺存状態の良い資料10点を取り上げる^(註8)(第2・3図、付表参照)。これらを先の実用鞞と比較して、共通する点や個々の靱形埴輪どうしの相違点を明らかにしたい。なお小稿では、高橋克壽氏のいう二類、すなわち奴舩型靱形埴輪については取り上げない。筆者も、高橋氏の指摘するように一類と二類の靱形埴輪のモデルとなった実用鞞を別種と考えるが、管見による限り二類の靱形埴輪のモデルと考えられる実用鞞の出土例はなく、実用鞞との比較検討という小稿の目的とは合致しないからである。

実用鞞は、靱の本体である矢筒と装飾である飾板とが別々に作られており、通常、古墳



から出土する靱といえ
ば矢筒のみを指す。各
部の名称については第
1図に示した。これに
対して靱形埴輪では、
矢筒と飾板が一体化さ
れて製作されている。
これは実用靱の使用状
況を埴輪で表現したの
ではないかと考えられ
る。なお靱形埴輪の各
部の名称については第
4図に示した。



第3図 靱形埴輪実測図(2)

番号は付表に同じ

実用靱(=矢筒)に飾
板が取り付けられた状
態で出土した例はな
い。これは飾板を取り
付けた状態では、棺内

への副葬が困難なためと考えられる。飾板は、現在わかる限りでは木製のものがほとんどである。また、矢筒から露出した鏃先にかぶせる帽子状のもの(注9)の出土例についても知られるが、これを靱形埴輪で表現した例はない。(注10)

靱形埴輪の矢筒部は、正面・側面とも裾広がり(注11)の長方形を呈するもの(1・2・3など)と断面長方形の直方体を呈するもの(7・9)とがある。実用靱では、古墳時代前期の資料であるA・Bなどで、裾広がり(注11)の長方形を呈する。しかし、今回図示していない中期以降の出土資料の中には、断面長方形の直方体を呈するものがある。(注11)

矢筒部の正面や側面に描かれた直弧文などの文様を区画するために梯子状の文様が描かれている(1・2・3など)。これは実用靱にみられる横帯を表現したものと考えられる。この横帯はA・Bを参考にすれば、矢筒の形状を維持する役割をもっていたものと考えられる。ただし中期以降の出土資料には、装飾帯としての機能が強まっているものもある。(注12)靱形埴輪の矢筒部にみられる直弧文や鍵手文を同様の場所に施文した実用靱はない。

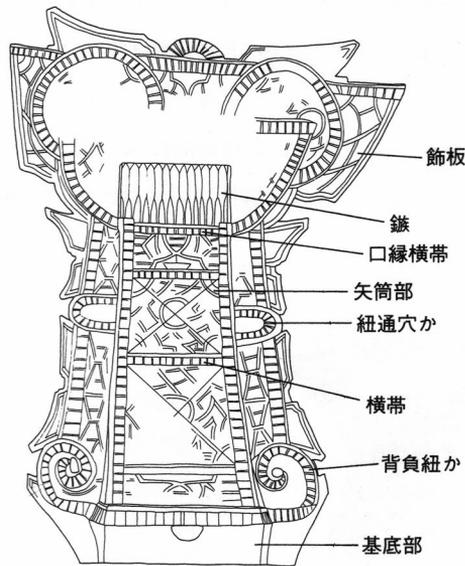
靱形埴輪に描かれた鏃に、銅鏃を描くものがある(4・8)。実用靱でも古い時期の古墳から出土する実用靱には銅鏃が多くみられ(A)、新しい時期の古墳から出土する実用靱になると鉄鏃が納められる(B)。

実用靱と靱形埴輪の比較を試みた結果、両者の間に共通する点がいくつかみられることがわかった。このことは、靱形埴輪の多くが、古墳時代前期の実用靱をモデルとして製作されていることを示していると考えられる。

実用靱にもみられる靱形埴輪の属性は、型式学的には、どのような変化を示しているのであろうか。次章ではその点について検討していくことにする。

4. 靱形埴輪の各属性の検討

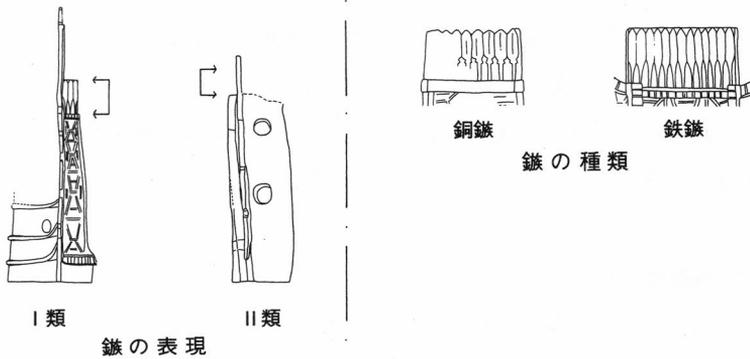
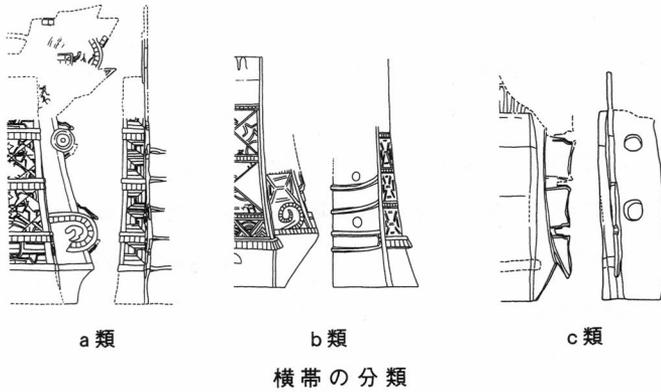
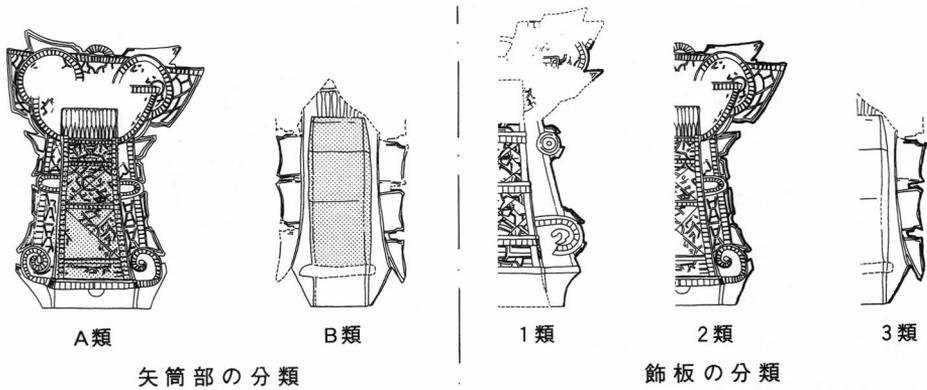
前章で明らかになった靱形埴輪の属性を、その形態的な変化にもとづいて分類する(第5図)。概要は次のとおりである。



第4図 靱形埴輪各部の名称

①**矢筒部の形状** 实用鞞に類似した裾広がり直方体のもの(A類)と、断面長方形の直方体を呈するもの(B類)とに分類することができる。両者の間には、出土した古墳の年代観からA類→B類という変遷を認めることができる。

②**横帯** 矢筒部の正面や側面にみられる直弧文などを区画する梯子状の表現は、横帯を表わしたものである。横帯の表現は、正面と側面に見られる横帯が連結している例(a



第5図 鞞形埴輪属性分類図(縮尺不同)

類)、正面と側面の

付表 鞍形埴輪一覧表

横帯が対応していない例(b類)、側面の横帯が消失した例(c類)がある。型式学的にみてb・c類がa類の退化形態であると考えられる。

番号	古墳名	所在地	全高	矢筒部	横帯	鍬表現	鍬種類	飾板
1	室宮山古墳	奈良県	147.5	A類	c類	I類	鉄鍬	2類
2	室宮山古墳	奈良県	122.5	A類	b類	I類	鉄鍬	2類?
3	萱振1号墳	大阪府	160.0	A類	a類	I類	?	1類
4	高廻り2号墳	大阪府	132.5	A類	a類	I類	銅鍬	1類
5	石津丘古墳	大阪府	140.5	A類	?	I類	鉄鍬	?
6	茶山1号墳	大阪府	91.0	A類	a類	I類	鉄鍬	?
7	茶山1号墳	大阪府	65.5	B類	c類	II類	鉄鍬	3類
8	庵寺山古墳	京都府	60.0	A類	a類	I類	銅鍬	1類
9	瓦谷埴輪窯	京都府	105.0	B類	c類	II類	鉄鍬	3類
10	石山古墳	三重県	122.0	A類	a類	I類	?	1類

③鍬の表現 鞍形埴輪に描かれた鍬については、すでに松木武彦氏によって指摘されているように矢筒部と同じ直方体の面に描かれるもの(I類)と、飾板と同一面上に描かれるもの(II類)とに分けることができる。I類では銅鍬を描いたもの(4・8)と鉄鍬を描いたもの(1・2・5など)がある。これは、モデルとされた実用鞍に収納された鍬の種類が異なっていたことを示し、実用鞍の出土例からみて、銅鍬を描いた鞍形埴輪が、鉄鍬を描いた鞍形埴輪に先行するものと考えられる。なおII類では、いずれも簡略化された鉄鍬が描かれている。

④鍬の本数 前項でI類とした鞍形埴輪に描かれた鍬の本数を単純に「正面の鍬数×側面の鍬数」で求めると、1の場合、13本×3本=39本となり、実用鞍に収納されていた鍬の実数に近^(注14)い。I類が鍬の実数を表わしていると考えられるのに対して、II類が平板的にしか描かれない。このことから、II類がI類の退化した形態であると考えられる。

⑤飾板 実用鞍に伴う飾板の出土例は2、3にすぎず、しかも全体像を知ることのできる出土資料がない。このため、鞍形埴輪の飾板と直接比較することは不可能なので、鞍形埴輪における飾板の変遷をみていくと、装飾である鱗が大型化していくことを指摘できる。これは、直線部分が多く鱗も小規模・少数である飾板(1類)、鱗が背負板の周囲に装飾される飾板(2類)、鱗と飾板の区別が不明瞭となる飾板(3類)という3つに分類することができる。これらは型式学的にみて1類→2類→3類という変遷が想定できる。

⑥直弧文・鍵手文の変遷 鞍形埴輪の矢筒部には、多くの場合、横帯によって区分された区画に直弧文や忍ヶ岡系直弧文、鍵手文などの文様が線刻されている。この直弧文の変化については、筆者自身の理解が十分でないため詳しく述べないことにするが、3に描かれた直弧文を最古式とし、8・10などには典型的なC型直弧文が描かれ、さらに1・2になるとかなり崩れてきているといわれる。

一方、鍵手文の場合は、おもに側面に描かれ、②で指摘したように古相のものは横帯で

区画されているが、新相になると横帯を無視してX字形の鍵手文が描かれる。靱形埴輪における鍵手文の変化は比較的明瞭に追えるといえる。

5. 靱形埴輪の分類と時期

第4章で検討したように靱形埴輪の各属性は、型式学的に2ないし3段階に分類することができた。第2・3図に示した靱形埴輪は、これらの属性の組み合わせによって大きく3群に分けることができた。各群における属性の組み合わせ・変遷は第6図に示した。各群の特徴は次のとおりである。

第I群 実用靱における裾広がりの方角を呈する矢筒と横帯が忠実に表現される(A類・a類)。銅鍍が描かれるが、これは古い段階の実用靱に一致する。飾板にも過大な装飾は施されない(1類)。このような特徴から実用靱をほぼ忠実に模倣して製作されたと考えられ、靱形埴輪の最古の一群として位置づけられる。

第I群の資料としては大阪府萱振1号墳例(3)・同高廻り2号墳例(4)・京都府庵寺山古墳例(8)・三重県石山古墳例(10)などが相当する。このうち萱振1号墳出土例・庵寺山古墳出土例・石山古墳出土例の3点は、各部の共通性が高く、同一の製作集団、あるいは同一の設計図によって製作された可能性を指摘したい。

第II群 全体の形状・大きさは第I群と変わらない(矢筒の形態はA類のまま)が、横帯

	矢筒部の形状	横帯	鍍の表現方法	鍍の種類	飾板
第I群	A類	a類	I類	銅鍍	1類
第II群		b類		鉄鍍	2類
第III群	B類	c類	II類		3類

第6図 靱形埴輪における各属性の変遷

の表現がb類またはc類と崩れ始めている。また銅鏃ではなく鉄鏃を描くものが主体となる。飾板は、鱗などの装飾が著しい2類となる。

第Ⅱ群の資料としては、奈良県室宮山古墳例(1・2)・大阪府石津丘古墳例(5)・同茶山1号墳例(6)などが相当する。これらは第Ⅰ群ほどではないにしても、各部に一定の共通性を認めることができる。

第Ⅲ群 第Ⅰ群・第Ⅱ群にくらべると大きな変化が認められる。まず全高が、1mを超えるものから1m未満のものへと縮小し、矢筒部の形状もB類のものが主体となる。矢筒部に描かれた文様や横帯の表現なども崩れてきており、無文のものも存在する。鏃は引き続き鉄鏃が描かれるが、背負板と同一の平面上に描かれるⅡ類となる。飾板は、鱗のみが大きく発達した3類となり、飾板と鱗の区別が不明瞭となる。

第Ⅲ群の資料としては、大阪府茶山1号墳例(7)・同瓦谷2号埴輪窯例(9)などが相当する。第Ⅲ群の資料には今回取り上げることのできなかった破片資料の多くが含まれるものと考えられ、さらに細分することも可能と思われる。

次に3群に分類した靱形埴輪の時期についてみることにしたい。第Ⅰ群では、三重県石山古墳の調査が行われている^(注15)。石山古墳から出土した副葬品には、小札革綴冑や巴形銅器など前期的な副葬品とともに、長方板革綴短甲や漆塗り革製盾・石製模造品など中期的な副葬品が存在する。このような副葬品の内容から石山古墳は、前期と中期の交わる頃に位置づけられると考える。

第Ⅱ群では、奈良県室宮山古墳の調査が行われている^(注16)。室宮山古墳では、典型的な長持形石棺の存在とともに、副葬品に各種石製品を含んでいたことが知られる。このことから室宮山古墳は、古墳時代中期前半代に位置づけることができる。

第Ⅲ群では、瓦谷2号埴輪窯出土例(9)が窖窯より出土している^(注17)。第Ⅲ群は、埴輪の焼成に窖窯が使用される古墳時代中期中頃という時期が目安になると考える。

6. まとめ

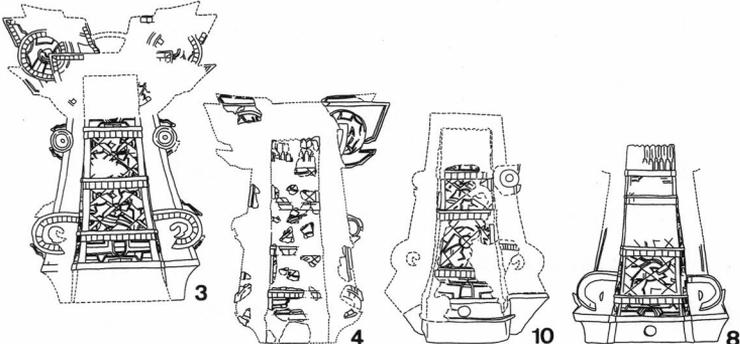
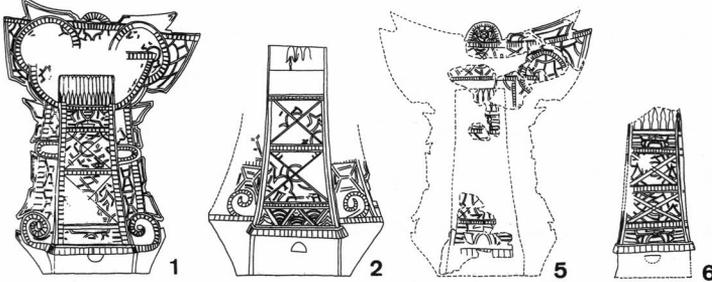
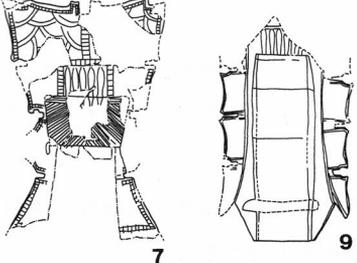
小稿では、古墳から出土した実用靱と靱形埴輪の比較検討を行なった結果、靱形埴輪を大きく3群に分類した。この3群は、型式学的にみて、また出土した古墳の年代観からみて、第Ⅰ群→第Ⅱ群→第Ⅲ群と変遷していったと考えられる。以上をまとめて編年案として示したのが第7図である。なお第Ⅰ群は古墳時代前期末から古墳時代中期初頭に、第Ⅱ群は、古墳時代中期前半代に、第Ⅲ群は古墳時代中期中頃に、それぞれ位置づけられる。

今回の検討を通じて靱形埴輪と実用靱の関係や、古相の靱形埴輪の変遷について明らかにすることができた。靱形埴輪のモデルについては、実用靱と第Ⅰ群の靱形埴輪の共通性

が高いことから、第1図A・Bのような実用鞍を直接のモデルとして、第2図3・4などの鞍形埴輪が製作されたものと考えられる。

また鞍形埴輪の変遷については、すでに高橋克壽氏によって示されている編年案とほぼ同じ内容となった。今後、鞍形埴輪の変遷を考えていく際には、第Ⅲ群の細分や、第Ⅲ群以降の鞍形埴輪の変遷、あるいは、いわゆる奴舩型鞍形埴輪の変遷などが課題となろう。

最後に今回の検討では、鞍形埴輪を埴輪祭祀の中にどのように位置づけられるのかとい

群	鞍形埴輪	時期
第Ⅰ群		前期
第Ⅱ群		中期
第Ⅲ群	 <p data-bbox="790 1425 978 1491">7・9は縮尺1/10 それ以外は縮尺1/20</p>	

第7図 鞍形埴輪編年案(番号は、付表に同じ)

うことについて、十分検討することはできなかった。ただ今回の検討を通じて、1点、気になる点に気づいたので述べておくことにしたい。すなわち、第Ⅰ群から第Ⅱ群への変化の指標として鍬の種類の変化を指摘したが、なぜ銅鍬を描くことをやめて鉄鍬を描くようになったのかという問題について、他の属性の変化が第Ⅰ群からの型式学的な変化で追えるのに対して、型式学的な連続性を認めることはできないのである。このことは、実用靱における銅鍬の消滅・鉄鍬の採用という事実と関連して考える必要があると思われ、単なる型式学的な変化で捉えるべきではないと思う。この点については、今後の資料の増加を待って改めて検討することにした。

(つつい・たかふみ=当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 拙稿「瓦谷古墳出土の靱について」(『京都府埋蔵文化財情報』第45号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注2 注1文献では、28例を取り上げており、その後数例の追加が認められる。

注3 注1拙稿

杉井 健 「Ⅳ 棺内出土靱の構造」(『雪野山古墳Ⅲ』雪野山古墳発掘調査団) 1993

菊池芳朗 「福島県会津大塚山古墳南棺出土の靱」(『福島県立博物館紀要』第8号 福島県立博物館) 1994

注4 栗林誠治 「古墳時代・靱の分類と変遷」(『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 真朱』第2号) 1993

注5 勝部明生「靱形埴輪小考」(『横田健一先生古希記念 文化史論叢』)1987

松木武彦「第5章 畿内における靱形埴輪の変遷 一埴輪に描かれた鍬と実物の鍬一」(『待兼山遺跡Ⅱ』) 1988

高橋克壽「器埴輪の編年と古墳祭祀」(『史林』71巻2号) 1988

注6 栗林氏の指摘にしたがう(注4文献 77～78頁)

注7 注1拙稿、注3杉井論文参照。両資料とも、菱形文を主文とする革製漆塗りの実用靱であり、この形態以外にも織物製や木製の出土例も知られる。

注8 各靱形埴輪の実測図は、各報告書より再トレースを行った。ただし5は、報告資料を筆者が図上復原してトレースした。また10は、後述注15文献に掲載された写真をトレースした。

注9 木製のものは、滋賀県雪野山古墳・福島県会津大塚山古墳で出土している。他の材質では福井県鼓山古墳で布製のものが出土しているという。また材質は不明ながら京都府園部垣内古墳出土例も飾板の可能性が高い。

注10 京都府瓦谷1号墳出土例など。

注11 大阪府亀井古墳出土例・三重県石山古墳出土例など。

注12 大阪府亀井古墳出土例・京都府西山塚古墳出土例など。

注13 注5松木論文参照。なお松木氏のいうⅠ式・Ⅱ式を筆者は、それぞれⅠ類・Ⅱ類とよみかえた。

- 注14 京都府瓦谷1号墳では銅鍬1本・鉄鍬41本が、滋賀県雪野山古墳では銅鍬30本が、それぞれ鞆に収納されていた。
- 注15 京都大学考古学研究室編『紫金山古墳と石山古墳』（京都大学文学部博物館）1993
- 注16 秋山日出雄・網干善教『室大墓』（奈良県教育委員会）1959
- 注17 石井清司他「3. 木津地区所在遺跡平成5年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第61冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1995

第1～3図の各実測図の出典

- A. 注3 杉井論文
- B. 注1 拙稿
1. 注16文献
 2. 注16文献
 3. 注5 高橋論文
 4. 永島暉臣慎他『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』（財）大阪市文化財協会 1991
 5. 笠野 毅他「履中天皇百舌鳥耳南陵の墳丘外形および出土品」（『書陵部紀要』第46号 宮内庁書陵部）1994
 6. 笠井敏光他「1. 茶山遺跡」『古市古墳群Ⅴ』 羽曳野市教育委員会 1984
 7. 笠井敏光他「1. 茶山遺跡」『古市古墳群Ⅴ』 羽曳野市教育委員会 1984
 8. 杉本 宏「1. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要」（『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第15集 宇治市教育委員会）1990
 9. 注17文献
 10. 注15文献